

学修支援から学修サービスへ ～ピアサポートの効果・効率的な運用に向けて～

From Learning Support to Learning Service
～ An Effective and Efficient Application of Peer Support ～

小西英行*
Hideyuki KONISHI

Keywords : Learning Support, Learning Service, Peer Support, Active Learning

1. 小規模大学における学修支援の特徴

文部科学省による三大都市圏における、大・中規模大学における入学定員の厳格化により、2016年度以降の三大都市圏とその他の地域の定員充足率の格差が小さくなった（文部科学省2018）。この結果、小規模大学の多くが定員を確保する一方、入学者の学力格差を含めた多様性が増すことになり、入学生に対する学修支援のあり方もこうした多様性に対応することが求められてきている。こうした多様性を持った入学生を大学全体で支援する取り組みは、①日常的支援や②制度化された学生支援、そして③専門的學生支援の3階層モデル（独立行政法人日本学生支援機構（2007）：通称、苦米地レポート）が参考となるが、小規模大学においては、マンパワーに勝る大規模大学のスケールダウンとしての導入には限界があり、人的ネットワークを駆使して工夫している現状がある（巻本2015）。このことは、小規模大学における学修支援上のデメリットである、マンパワーの不足やファシリティ上の制限を、教職協働などの人的ネットワークの活用や、小規模ならではの意思決定の迅速性や情報共有の容易さというメリットによって、上位層と下位層の学力差が大きい入学生の多様性に対応していかなければならないことを意味している（表1）。

表1：小規模大学における、学修支援上のメリット・デメリット

- ①小規模大学における学修支援上のデメリット
 - ・マンパワー不足
 - ・ファシリティ上の制限
- ②小規模大学における学修支援上のメリット
 - ・人的ネットワークの活用（教職協働など）
 - ・意思決定が迅速
 - ・情報共有がスムーズ

* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

ところで、学力差の大きい上位層と下位層について、その特徴をコンピテンシーとリテラシーの2つの視点で分類すると、およそ表2のようになる。

表2：リテラシーとコンピテンシー毎の学修支援の特徴

	コンピテンシー高	コンピテンシー低
リテラシー高	<p>①指導容易層</p> <p><学生の特徴> ・絶対数少ない ・現状に満足しがち</p> <p><学修支援の方法> ・成果を見える化し、少しずつ上昇意欲をもたせる</p>	<p>③コミュニケーション力向上必要層</p> <p><学生の特徴> ・真面目で出席率・課題提出率等が高い ・ALやGWが苦手で、独善的になりがち</p> <p><学修支援の方法> ・教職員からアプローチし、学修上に必要な自主性等を育む</p>
リテラシー低	<p>②基礎学力向上必要層</p> <p><学生の特徴> ・自主的に行動するが、成果が中途半端であることが多い</p> <p><学修支援の方法> ・リテラシーの足りない部分を懇切丁寧に指導しつつ、自立した学びを育む</p>	<p>④指導困難層</p> <p><学生の特徴> ・勉強できないこと、自主的に行動できないことを恥ずかしいと思わない</p> <p><学修支援の方法> ・学びの必要性と、真摯な行動の重要性を、懇切丁寧にコーチングする</p>

①リテラシー及びコンピテンシーの両方が高い学生は、基礎学力が高く、コミュニケーション力が高いため、学生自らが主体的に学ぶ力を持っており、学修支援としては学生からの自発的な相談に的確に対応できる体制を整えることが求められる。具体的には、通常のオフィスアワーの設定や問い合わせのメールアドレスの開示などで対応できる。ただし、学内での絶対数があまり多くないため、当該学生の多くが現状で満足しがちなことが多く、こうした上位層を引き上げるための学修支援が望まれる。

②コンピテンシーが高いけれども、リテラシーが低い学生は、自主的に行動するが、成果が中途半端であることが多く、基礎学力を高めるために懇切丁寧に指導しつつ、自立した学びを育むことが重要となる。

③リテラシーが高く、コンピテンシーが低い学生は、まじめで出席率が高く課題提出率も高いが、アクティブ・ラーニングやグループワークが不得意であることが多く、教職員から積極的にアプローチして学修上に必要な自主性等を育むことが重要となる。

④リテラシー及びコンピテンシーの両方が低い学生は、勉強ができないことや自主的に行動できないことに負い目を感じていないケースが多く、学びの必要性と、真摯な行動の重要性を懇切丁寧にコーチングすることが重要となる。

2. 教育から、学修支援、学修サービスへ

こうした多様な入学生に対する学修支援は、「教える」から「育てる」という視点で取り組むことが重要であり（山内 2015）、特にリテラシーとコンピテンシーの両方、又は一方が著しく欠如している学生に対しては、一から教え直さなければ育てることはできないので、「支援」＝「手を差し伸べる」レベルではなく、「サービス」＝「世話をする」という感覚で、学生と向き合うことが必要となる。また一方で、リテラシーとコンピテンシーの両方が一定水準以上

の学生に対しては、これを大きく引き伸ばすための取り組みが必要であり、寄り添って伴走するコーチのような支援が求められることになる。

多摩大学経営情報学部では、こうした多様な入学生に対する学修支援を行う組織として、2017年4月より、図書館内に学修支援を専門に行うブース（学修サービス窓口）を設け、教職員を常駐させることにより、学生がいつでも困ったときに、様々な学修上の相談ができるようにした。多摩大学経営情報学部はマンパワーに劣るものの、若手教員が近年まとめて採用されたこともあり、ティーチングロードに空きのあるこれら若手教員を活用してこれを実現した。学修支援窓口ではなく、学修サービス窓口と命名したのは、「支援」＝「手を差し伸べる」だけでなく、学生に対して「サービス」＝「世話をする・奉仕する」という感覚で、小規模大学ならではのアットホームな取り組みとしたいという理由からである。

また、学修支援ブースへのマンパワー投入においては、大学院生等の学生スタッフの活用や、教職員対応の予約制等によって効率化を図るケースがあるが、問題となるのは、せっかくこうしたブースを設けても、学生がこれをうまく活用してくれないことが多いことにある。そこで本稿では、こうした学修支援ブースの効果・効率的な運用に向けた課題を考察する。

3. アクティブ・ラーニングと学修支援

大学での学びには、授業内、あるいは狭義には教室内での学修と、授業（教室）外での学修がある。例えば、広島県立大学では、グループワーク、ディスカッション、反転授業等の、授業（教室）内での参加型学修タイプのアクティブ手法と、フィールドワーク、現地体験、実地調査等の、授業（教室）外での行動型学修の2つを導入し、これらの相乗効果を目指している（図1：馬本2015）。

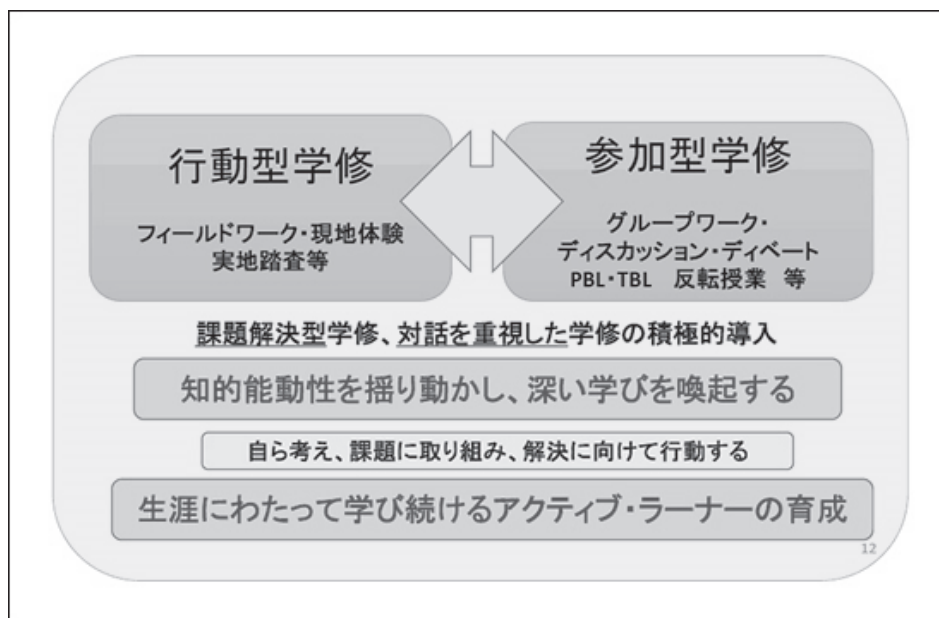


図1：広島県立大学型アクティブ・ラーニングの特徴

ここで重要なのは、授業（学内）での参加型学修タイプのアクティブ・ラーニングであれ、また授業（教室）外のアクティブ・ラーニングであれ、学生自身の事前・事後の学修があって初めてこれが活性化されることである（表3）。

表3：アクティブ・ラーニング手法と学修支援

- ◆ 大学での学び = 授業（教室）内学修 + 授業（教室）外学修
 - ▷ 授業（教室）内学修の取り組み
 - ▷ 参加型学修タイプのアクティブ・ラーニング
 - ▷ グループワーク、ディスカッション、ディベート、PBL・TBL、反転授業等
 - ▷ 事前・事後学修
 - ▷ 予習・復習や課題レポートなど
- 授業（教室）外学修の取り組み
 - ▷ 学外研修（学外アクティブラーニング）
 - ▷ フィールドワーク、現地体験、実地調査等
 - ▷ 事前・事後学修
 - ▷ 予習・復習や課題レポートなど

また、1. で述べたように、リテラシーとコンピテンシーにおいて多様な学生が混在する中では、事前・事後の学修に必要な内容や方法が、多岐にわたっていることになり、これを支援するための組織である学修支援組織もまたこれらの多様性に対応しなければならないことになる。つまり、学修支援は、「リテラシー」又は「コンピテンシー」のタイプによって、内容や方法を検討する必要があるということになる。こうした点を考慮して、多摩大学の学修支援組織である「学修サービス」は、いかなるタイプの学生であっても、いつでも確実に相談を受けられるように、相談案件の有無にかかわらず教員が常駐して対応にあたっている。また、目的意識のはっきりした相談、例えば資格取得やレポート作成の方法などについては、相談内容のFAQである「多摩大のあるき方」という Tips 集を編集し、配布している。また、目的意識のはっきりしていない漠然とした相談については、「よろず相談所」として、どんな些細なことでも気軽に相談できるような雰囲気づくりに努めている。

ここで問題となるのは、この学修サービスのブースに、たとえ教職員が常駐していたとしても、その時間が空き時間である学生がいなければ、そもそも相談に来ることはない。多摩大学のような小規模の大学の場合、お昼休みを挟んだ2時限目、3時限目の授業は、ほとんどの学生が授業を履修しており、学生が授業を履修していない5時限目以降は、ほとんどの学生が授業後速やかに下校するため、よほどの目的意識が高くない限り、相談に訪れる学生は少ないことになる。そこで、学修支援をカリキュラム編成や時間割編成と緊密に連携することで、その効果と効率を高めることとした。

4. カリキュラム編成・時間割編成と学修支援

学修支援をカリキュラム編成や時間割編成と緊密に連携した例として、玉川大学の事例があげられる。玉川大学では、大学のカリキュラム・ポリシーで「授業の履修にあたっては、大学設置基準に定められた単位の基準を踏まえ、1日8時間の授業および授業外学修を標準とし、半期の履修上限単位を16単位とします。また、半期ごとに学修状況判定を設け、一定のGPAをクリアすることを求めます」（玉川大学HP）とし、学士課程答申や質的転換答申で示された大学設置基準の単位制度の実質化を強く意識したものとなっている。具体的には、20単位と定めていた1学期の履修単位数の上限を16単位とし、これが2学期4年間続くので、4年間で合計128単位しか取れないことになり、「単位を落とす」を出来なくしている。この理由について菊池（2013）は、「1単位を1時間の授業と合計2時間の予習復習の時間を15週行うという大学設置基準を守るためと、自主的な学生の輩出」を挙げている。また、これを可能にする時間割として、「一つの授業を受けたらすぐ次の時間に授業を取れないような仕組み、すなわち授業と授業の間に空き時間を作る」編成を行っている。さらに、この空き時間に学生がしっかりと学修を行うために、予習・復習を前提とした授業内容を展開し、学修支援サービスによってこれを教職員一丸となってサポートする体制を取っている。

多摩大学経営情報学部では、この玉川大学における単位制度の実質化の取り組みを参考に、2017年度から開始した学修サービス（支援）制度に加え、2018年度から初年次教育のカリキュラム体系と空き時間を活用する時間割編成を実施し、学修支援ブースの効果効率的運用を行っている。

5. 学修支援から学修サービスへ

2018年度の経営情報学部の時間割編成においては、空きコマを意識的に作り、学生の学校滞在時間を増やし、その時間を中心に学内授業外学修を支援することとした。具体的な時間割のイメージは、表4にあるように、1年生は2時限目、2年生は3時限目を中心に空きコマを作ることにした。ただし、2年生においては移行的な措置として、完全に空きコマとなるのは木曜日3時限目だけとし、それ以外の曜日は空きコマを入れずに時間割を編成できるようにした。そして学生の空き時間に対応して、表5のような教職員担当表を作成し、それぞれの相談教職員の得意な相談内容なども記載した。

さらに、このように空きコマを意識的につくって学修サービス窓口への相談を誘導するからには、この空きコマで学生が主体的に学修行動をとるような取り組みが必要である。1年生においては、クラス展開して全1年生に履修を促す「必修・選択必修科目」の担当者が連携して、空きコマに取り組ませる課題等を提示し、学修サービスでこれを支援する。特に、授業毎に配布される資料を、科目や配布順に綴じるなど、日頃の習慣づけから始めることが重要であり、万が一欠席した授業で配布された資料などが、学修サービス窓口脇にキャビネットを設置して保管し、学生がいつでも足りない授業資料を手に入れることができるようにした。

表 4：時間割のイメージ

2018年度 多摩大学経営情報学部 時間割（1年生）のイメージ

	月	火	水	木	金
1 時限	選択必修科目 クラス展開	選択必修科目 クラス展開	必修科目 クラス展開	選択必修科目 クラス展開	選択必修科目 一部クラス展開
2 時限	選択必修科目 半数空きコマ	完全空きコマ	完全空きコマ	選択必修科目 半数空きコマ	選択必修科目 一部空きコマ
昼休み					
3 時限	必修科目 クラス展開	必修科目 クラス展開	必修科目 クラス展開	必修科目 クラス展開	選択必修科目 一部空きコマ
4 時限	選択科目	選択科目	選択科目	選択科目	選択必修科目 一部クラス展開
5 時限	配当科目なし	配当科目なし	配当科目なし	配当科目なし	配当科目なし

表 5：学修サービス窓口の教職員対応表

学修サービス窓口 対応 予定 (2017年度)					
	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
2 時限	葛本 幸枝 ・ノート&レポート ・キャリア相談、 ・人生相談、他	丹下 英明 ・ノート&レポート ・人生相談 ・AL実践、他	葛本 幸枝 ・ノート&レポート ・キャリア相談、 ・人生相談、他	野坂 美穂 ・ノート&レポート ・人生相談 ・AL実践、他	葛本 幸枝 ・ノート&レポート ・キャリア相談、 ・人生相談、他
昼休み	小西 英行 ・ノート&レポート ・人生相談 ・PC活用、他	丹下 英明 ・ノート&レポート ・人生相談 ・AL実践、他	葛本 幸枝 ・ノート&レポート ・キャリア相談、 ・人生相談、他	野坂 美穂 ・ノート&レポート ・人生相談 ・AL実践、他	野坂 美穂 ・ノート&レポート ・人生相談 ・AL実践、他
3 時限	葛本 幸枝 ・ノート&レポート ・キャリア相談、 ・人生相談、他	葛本 幸枝 ・ノート&レポート ・キャリア相談、 ・人生相談、他	小西 英行 ・秘書検定 ・受験対策講座 ※(登録必要)	小西 英行 ・ノート&レポート ・人生相談 ・PC活用、他	野坂 美穂 ・ノート&レポート ・人生相談 ・AL実践、他
4 時限	小西 英行 ・ノート&レポート ・人生相談 ・PC活用、他	小西 英行 ・販売士検定 ・受験対策講座 ※(登録必要)	葛本 幸枝 ・ノート&レポート ・キャリア相談、 ・人生相談、他		葛本 幸枝 ・ノート&レポート ・キャリア相談、 ・人生相談、他
5 時限	水盛 涼一 ・ノート&レポート ・中国語 ・人生相談、他	小西 英行 ・ノート&レポート ・人生相談 ・PC活用、他	水盛 涼一 ・ノート&レポート ・中国語 ・人生相談、他	水盛 涼一 ・ノート&レポート ・中国語 ・人生相談、他	

その他の取り組みとして、毎月相談件数が多くなりそうな内容を、月間強化相談項目として掲示したり（表6）、教養講座や各種イベントなどを企画することにより（表7）、学生の相談を促すことも企画した。

表 6：学修支援の強化相談項目

- 4 月当初：履修相談中心
- 5 月：ノートテイキング・授業資料等の整理法
- 6 月：課題レポート作成法
- 7 月：期末試験対策

- 10月：読書感想文コンテスト（1年生全員参加）
- 11月：ノートテイキング・授業資料等の整理法
- 12月：課題レポート作成法
- 1月：期末試験対策

表7：教養講座・資格取得イベント等

- 4月当初：人生相談中心
- 5・6月：卓球イベント実施
- 7月：ビジネス検定・MOS試験対策
- 10月：多摩祭イベント
- 11月：教養講座
- 12・1月：ビジネス検定・MOS試験対策

以上、多摩大学経営情報学部の学修サービス（支援）においては、学生の「困った」を無くすために、大学キャンパス内での滞在時間を増やし、空き時間にアクティブな学修を学生が行えるような環境を整備することで、学生に対してサービス（奉仕）することで、ピアサポートの効果・効率的な運用を行っている。

<参考文献>

- ・馬本勉 (2015). 「アクティブ・ラーニングを軸とした教育改革の課題 ～県立広島大学～」
- ・金田徹・小川洋 (2012). 「学習支援センター」, 『大学における学習支援への挑戦～リメディアル教育の現状と課題』(第7章) ナカニシヤ出版
- ・菊池重雄 (2013) 「【玉川大学 キャップ制】履修単位数の上限を定め、学生の学修時間を増加させる」大学 Times Vol.11 (2013年12月発行)
- ・末田,真樹子・堀一成・久保山健・坂尻・彰宏 (2014). 「職員・教員・TA 協働による学修支援の取組 : 大阪大学附属図書館における「レポートの書き方講座」を中心に」大阪大学高等教育研究. 2 P.55-P.6
- ・巻本彰一 (2015). 「小規模大学における学修支援」, 第20回FDフォーラム「学修支援を問う～何のために、何をどこまでやるべきか」第12分科会報告書 大学コンソーシアム京都
- ・溝上慎一・及川恵 (2012). 「学生の学びと成長・支援」, 『生成する大学教育学』(第4章) ナカニシヤ出版
- ・山内乾史編 (2015). 『学修支援と高等教育の質保証』学文社
- ・渡部信一 (2013). 『日本の「学び」と大学教育』 ナカニシヤ出版
- ・文部科学省 (2005). 「平成28年度以降の定員管理に係る私立大学等経常費補助金取扱について 年度以降の定員管理に係る私立大学等経常費補助金取扱について(通知)」(平成27年7月10日27文科高第361号・私振補第30号)
- ・文部科学省 (2018). 「平成31年度以降の定員管理に係る私立大学等経常費補助金の取扱について(通知)」(平成30年9月11日30文科高第454号私振補第49号)
- ・独立行政法人日本学生支援機構 (2007). 「大学における生相談体制の充実方策について」